Nagoya J. Health, Physical Fitness, Sports Vol. 15, No.1 (March 1992)

1911年における野球論争の実証的研究（Ⅲ）
－「野球論争」から「第一回全国優勝野球大会」開催に至る朝日新聞の動向，及び同紙にあらわれた学生野球観について－

The positive study of baseball controversy in 1911（Ⅲ）
－About the movement of Asahi newspaper and the viewpoint of student baseball on it's paper, from "Baseball Controversy" to "the first all-Japan middle school baseball championship" －

秦　真人*　加賀秀雄*

Mahito HATA *, Hideo KAGA *

The purpose of this study was to explain the whole standpoint of Asahi newspaper toward Student Baseball from "Baseball Controversy" to "the first all-Japan middle school baseball championship". This study was inverstigated by analyzing the difference of editorial contents which are from "Baseball Controversy" to "the first all-Japan middle shcool baseball championship" on two papers "Tokyo-Asahi newspaper" and "Osaka-Asahi newspaper", and by analyzing contents of "the round-table talk of remembering baseball championship".

As the generalization of this study, we present the following point:

On previous historical study of sports, it seemed to us that the Asahi newspaper was conducting both the campaign of removining baseball and the opening of "the all-Japan middle school baseball championship". Even though those two were conducted at the different time, it seemed rather contradicting to us. However, as we studied the predominent view of Asahi newspaper, it was clear that both the campaign and the opening of baseball championship were based on different editorial policy. After all, that is the campaign of removining baseball was the policy of Tokyo-Asahi newspaper and the opening of "the all-Japan middle school baseball championship" was that of Osaka-Asahi newspaper.

はじめに

本研究の対象である「野球論争」について，筆者らはすでにこれまでに，この論争が有する背景的要因を明らかにするとともに[1]，この論争の全体像への接近を試みてきた[2]。さらに『1911年における野球論争の実証的検討－「東京朝日新聞」及び「大阪朝日新聞」の編集内容の相違をめぐって－』[3]では，以上の研究の過程で明らかになってきた東京朝日新聞と大阪朝日新聞の編集内容の相違点に着目し，「野球論争」当時の朝日新聞社総体としての学生野球に対する立場を考究してきた。

本研究ではそれらの成果を踏まえ，「野球論争」当時における朝日新聞の立場と同社主催「全国優勝野球大会」開催との間に介在する相互関係に視点をおき，「野球論争」（1911年９月）以降，「第一回全国優勝野球大会」開催（1915年８月18日）に至るまでの朝日新聞社の動向の検討ならびに，論争後の朝日新聞紙上にあらわれた学生野球観についての検討，さらには新たに発掘した資料[4]の分析から「野球論争」と「第一回全国優勝野球大会」開催との間における相互関係をより深化したかたちで把握することをねらいとしたものである。

Ⅰ　東京朝日新聞と大阪朝日新聞の編集方針の相違

*　名古屋大学総合保健体育科学センター

*　Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

従来のスポーツ史の見解において，この「野球論争」の契機となった東京朝日新聞の連載記事『野球界の諸問題』及び『野球と其害毒』は，朝日新聞社総体として行われた野球排撃キャンペーンであるととらえられる傾向にあったように思われる。しかしながら，我々は先行研究において「野球論争」に係わる東京朝日新聞の一連の連載記事は，東京朝日新聞社独自の編集方針にもとづいてなされたものであり，大阪朝日新聞を本社とする朝日新聞社総体としての編集方針によるものでは必ずしもなかったことを明らかにしてきた。

そして「野球論争」以降，さらに「第一回全国優勝野球大会」開催当時においてさえも，東京朝日新聞の創設当時からの組織運営の独自性に基本的に起因して，東京朝日新聞と大阪朝日新聞の学生野球に関する記事内容，及びそれらを含む学生野球に対する姿勢は，それぞれ独自の編集方針にもとずくものであったことが，その期間の記事内容の分析から確認することができた。

（1）東京朝日新聞にみられる学生野球に対する姿勢

「野球論争」以後の東京朝日新聞において，『野球と其害毒』にみられたような野球を否定論的に論ずる論調の記事は紙面からは見られなくなり，代わって野球に関わる記事内容は早稲田大学，慶応義塾大学，明治大学の三大学を中心として関東地方で行われた学生野球の試合結果の報告記事と，それら関東の学生野球界に係わる論説記事がわずかに掲載されているにとどまっている。それらは全体的に見て地域的に限定された記事内容であり，一時のような学生野球の是非を全国的に問いかけるような顕著な動きはみることができなかった。つまり『野球と其害毒』以後，東京朝日新聞において，これらの野球問題についての論評は一切なされてこなかったといえる。それ故，「野球論争」から「第一回全国優勝野球大会」開催に至るまでの間，「野球論争」の反響等を紙面から見ることはできなかった。

そして，あえて学生野球に関する特集記事を挙げるとすれば，1912年5月23日から6月16日まで『野球三十六計』と題して十二回にわたる野球の戦術に関する紹介記事が掲載されたほか，1914年1月1日，3日の両日における『日本の國技となるべき者▽相撲か野球か』と題する安部磯雄の論評，1915年4月23日から26日の三回にわたる『慶應野球部の改善を促す』及び同月24日，27日両日における『野球界』においての論評記事を見ることができるにとどまっている。

それらの記事の一部を引用すれば，『野球三十六計』では「**攻撃の詭計共謀** 本邦野球史は三十八年早大第一回の渡米を以つて近世史に入り四十三年紐育巨人軍の慶應指導を以つて現代史を爲す外形の進化は近世史の特質にして内容の充實は現代史の誇りとする所なり而して近世野球術に於いて守備に於ける下手投の傳來以上に野球界に大變動を來さしめしものは攻撃に於ける驚く可き軟打の普及なり」[5]として，バント攻撃，盗塁，ヒットエンドランなど，当時としては普及前の野球戦術が長期にわたって紹介されているに過ぎないものであった。

次に『日本の國技となるべき者▽相撲か野球か』では，「國技となるべき遊技は非常に面白味のあるものでなくてはならぬ。競技者自身に興味があるのみでなく，見物人にも多大の愉快を與ふるものでなくてはならぬ。換言すれば見物人が高き見物料を拂ふことを辭せざる程に熱中する所の遊技たることを要する更に言へば人氣といふことは國技の第一要素である（中略）身體の發達を來すとか，精神の修養を助けるとかいふことすら必ずしも必要條件ではない。如何に上記の利益が伴うて居ても若し面白味がなく人氣がなければ到底國技たることは出來ぬ」[6]として，当時すでに「日本の国技」といわれていた相撲と，弓術ならびに柔術との比較論を展開している。そして後半において「各方面より各遊技の長所を見れば容易に其優劣を定むることは出來ない。然し見物人に與ふる面白味といふ點から言へば野球は全く群を抜いて居ると言はねばならぬ，（中略）野球は競技者の數に

於て，又其競技の複雑にして變化の多き點に於て遙に他の競技よりも面白味がある」[7]とし，「然し國技たると否とは見物人に大なる面白味を與ふるか否かによつて定まる。此標準によりて判斷すれば野球が其人氣といふ點に於て今日既に相撲と相匹敵し得ることは明白なる事實である。今日の青年が老年となる時代には野球趣味の發達は驚くべきものがあるに相違ない」[8]と論じている。

次に，ほぼ同時期に掲載されている『野球界』，及び『慶應野球部の改善を促す』を見てみると，『野球界』においては「春は深くなつて競漕會の季節は野球のそれに移り變る天候と事故とに障害された今春の野球季節は纔に一高對三高の試合が去る五日に行はれた以來中斷されて仕舞つて居る…」[9]といった一節で始まって，この年の早稲田大学，慶応義塾大学，明治大学の三大学を中心にした学生野球界の状況を紹介しているにすぎない。また『慶應野球部の改善を促す』では，「諒闇明の春のシーズンは，滿都野球狂に多大なる興味を持つて期待されて居たのである，三大學爭覇戰，一高軍の活動，布哇シーエーシーの來襲等，實に應接に暇なき好況である，然るに悲しむ可き情報が三田より傳へられた卽ち選手多數の落第に依り，慶應軍は遂に全滅の悲運に陷つてしまつた事である」[10]と述べられているように，慶応大学野球部の内部問題について論じられた投書が掲げられたものであった。

以上のように，東京朝日新聞に掲載された野球に関する特集記事を見てみると，最後の投書のように野球に対する批判的態度が少なからず残存する論調の記事も見ることができたが，前二者の記事にみられるように，東京朝日新聞紙上においても「野球論争」当時と比較して，野球ならびに近代スポーツに対して理解を示す姿勢が，かすかにうかがうことができるものもあった。しかしながら，いずれの特集記事においても「野球論争」，ならびに「全国優勝野球大会」と直接的に関連するような記事内容のものではなかったことは明らかである。

また，大阪朝日新聞が1915年７月１日に「第一回全国優勝野球大会」開催を発表して以降，最初に「全国優勝野球大会」についての関連記事が東京朝日新聞紙上に掲載されたのは，一ケ月半を経過した８月15日になってからのことであり，このことからも東京朝日新聞社としての「全国優勝野球大会」に対する積極的な姿勢というものは，ほとんど見られなかったのではないかと推測することができる。

（２）大阪朝日新聞にみられる学生野球に対する姿勢

大阪朝日新聞においては，前述した関東地方で実施されている学生野球の試合のほかに，「九州野球大会」，「東海聯合野球大会」，「関西野球大会」，「北陸野球大会」，「全国直轄学校野球戦」[11]等，各地方の野球大会の詳細な試合報告と紹介記事が随時掲載されている。例えば1913年９月１日の『北陸野球大會雜觀』の一部を挙げれば，「金澤四高校庭の北陸野球大會は早大の阿部運動部長を始め日比野愛知一中，中山京都二（ママ）中校長の運動好き兩太關が愛對京軍の勝負如何と血眼になつて居たるはこの仕合と共に近來の奇觀であつた▲流石に愛知一中は總てに於て嶄然として頭角を露はせるのみならず其謙讓の美風は愛知をして今日の名を成さしめたる所である▲之に次ぐは京都二中は兎も角長野師範が今回の優勝戰に加はる事の出來なかつたのは遺憾千萬だが東海の第一者愛知一中を向ふに廻して十回の激戰を遣つたのは目覺しく慥に打擊に於ては長野を第一位に推さゞるを得ない…」[12]といった内容に代表されるがごとくである。

また1913年10月には，その当時，明治大学の招待により来日中のワシントン大学，及び早稲田大学，明治大学の三大学を大阪に招聘して，大阪朝日新聞社主催の「日米野球戦」を開催している。そしてこの野球戦に向けて，「秋高く風爽かに運動の好時季は來れり，明治大學の招きにより來朝せる米國華盛頓大學の野球選手が過般來東京に於て揮ひ居る鐵腕は，眞に以て我が學生の好敵手たるべく，其華々しき好ゲームは既に讀者に多大の感興を與へたるべし。我社

は同選手が東京に於ける戰闘を終るを機とし，我國に於て斯界の覇を稱へ居る早稲田明治の兩大學選手と共に，之を請待して，其雄氣を倍し興味を新にして，茲に關西に於ける妙技の記録を造り，併せて龍拏虎搏最後の快戰を行はしめんとす」[13]という社告記事にはじまる大小十数回にわたる広告記事，ならびに八回におよぶ『大野球戰前記』と題する紹介記事，およびその他関連記事などが9月21日から10月8日に至るまでの期間，大々的に掲載された。その中の『大野球戰前記』の記事を紹介すると「…關西方面にては對市俄古，對麻尼拉，對スタンフォード等日米野球戰は今日まで已に數回擧行され居れるも今回の如く**内外三大學が一場に會し相戰ふが如きは關西は勿論大舞臺の東京にすら未だ嘗て見ざる所**にして早明兩軍が如何にその秘術を盡して最後の奮闘をなすか彼を見此を見るの興趣は誠に球界空前の壯擧なり…」[14]と論じた後，「華軍の技倆」と題してワシントン大学の選手紹介を展開し，また大会に先立ち観覧無料，運動場修繕，停留場の新設などの「日米野球戰」に向けての準備状況を詳細に記している。また，後述する応援の問題と関連する興味ある見解として，「**勇しき應援隊**野球戰に應援の必要な事は素人の想像にも及ばぬ程で，是れが**血眼になつて戰つて居る選手の力附**けになるのみならず，野球を觀て居る見物に殆んど**野球そのものと同一程度の壯快なる興味**を與ふるものである（中略）激した見物の血を更に沸かせて愉快とも悲壯とも何とも喩へ様のない心持を與へるものである，即ち此場合に於て應援隊は確にゲームの一要素たるもので行り方が旨いと少からず戰士の勇氣を鼓舞し從つてクロースゲームの面白いのを見せる事が出來る，故に我社は今回の大野球戰に於ては此應援隊にも重きを置き…」[15]と野球における応援者を評価して論じられている一節もあった。

すなわち，このような大阪朝日新聞の学生野球に対する積極的な姿勢は，東京朝日新聞の学生野球に対する姿勢とは無関係に，「全国優勝野球大会」開催に向けての土壌が既に築かれつつあったことを十分にうかがい知ることができるものであった。

しかしながら「野球論争」当時において，大阪朝日新聞は特集記事『日曜附録野球號』の中で，関東で盛んな「野球論争」に関して直接的に論じることなく，関西学生野球界の状況紹介等の記事をわずかに掲載したのにとどまっていた[16]のと同様に，「野球論争」以降，「第一回全国優勝野球大会」開催決定時（1915年7月1日）までも，大阪朝日新聞は学生野球に関わる問題を取り上げる論評，及び野球観を論じるような記事をその紙上において展開することはなかった。そして大阪朝日新聞紙上において，野球問題を含めた学生野球に対する積極的な論評記事が掲載されるのは，「第一回全国優勝野球大会」開催決定後，約二ケ月間の一連の新聞記事においてである。すなわちこの中では，安部磯雄（早稲田大学教授）をはじめ鎌田栄吉（慶応大学学長），原田助（同志社長），武田千代三郎（神宮皇学館長），木下東作（大阪高医教授），末廣重雄（法学博士），都築彌四郎（法学士）らの学者，ならびに大久保利武（大阪府知事），平岡寅之助（日本製樽株式会社取締役）らの政界，財界を代表する識者，および長谷川万次郎（如是閑），和田信夫（六灘子），田村省三（木国）らの大阪朝日新聞関係者による，学生野球観が掲載されている。従って以下では，彼らの学生野球観を通して，「野球論争」当時と「第一回全国優勝野球大会」開催当時の学生野球観の比較，およびその検討を試みることにする。

Ⅱ　新たに登場した学生野球観の特徴

ここでは「野球論争」当時にあらわれたような学生野球を否定的に論じたり，あるいは完全擁護的に論ずる極端な見解はみられない。とりわけ「野球論争」当時，「今日の野球選手を見るに，大部分は學問も出來，身体も丈夫，働きもある，社交にも慣れて居る誠に（ママ）立派な人だと思ふ（中略）要するに野球は決して世の一部の反對論者が云ふが如き非難すべき點は少しもない」[17]と野球に対して完全擁護的立場を示し

ていた鎌田栄吉等も，「併し乍ら物に法ありで如何に有益なる野球でも遣り方一つでは多大の弊害を釀す（中略）洵に寒心すべき結果を惹起する，現に近來の野球界を觀るに是等の弊の決して尠からぬのは遺憾此上もない事である」[18]とその行われ方如何によっては，弊害も存在することを認めるようになったところなどには，「野球論争」が与えた影響の一端がうかがわれるところである。

そして，ほとんどの論者が学生野球の価値を高く評価しながらも，学生野球に内在する問題点を認識しつつ，なおかつそれを改善し更なる発展を「全国優勝野球大会」の開催，ならびに将来の学生野球の展開に託しているというところに，全体としての特徴があるといえる。

（1）学生野球に対する評価

学生野球に対する評価という点では，「現下青年學生の間に行はれつゝある各種の運動遊戯中野球が最も健全にして且有益なるものゝ一たるべきは之を明言するに躊躇しない」[19]，「慥かに▲**大正の青年運動**方法の一としては最も適當なるものである，亞米利加の青年が元氣に富むのもこの國技があるからだとの感があり，英國の青年が父祖を恥かしめざる元氣を有するのは，野球に似たクリツケツトがあるからで我輩も敢て野球のみを推奬するのではないが，今後生存競爭の盛んになる社會に出でやうとする青年諸君は，かういふ男性的遊戯で以て百度以上の炎天の下にやつても，倒れぬ様な練習を仕たならば，學校を了り社會に出でた時に十分なる活動を期待することが出來る」[20]とする健康論的な視点からその価値を論じたものから，「恐らく青年學生が智情意の完全なる發達と立派な人格の修養上野球位理想的の遊戯は他に多く類を見ないのである（中略）全體野球技なるものは若し是を善用する塲合には青年學生，殊に德性涵養の最も大切な階段に在る中學生に取りては▲**偉大なる効果**ある物と確信する，即ち試合中團體の爲には自己を殺して迄も所謂サクリフアイをやり全團體の爲を圖るは少にしては義俠，犧牲的精神を養ひ大にしては盡忠報國等の愛國的大精神の淵源となる机上の終身倫理の講釋以上に非常なる精神教育となる，夫れから一致行動を採る結果は惹いては團結心を増加し攻撃防禦共に科學的作戰を行ふは常識の發達となり頭腦を明晰にならせる，若し夫れモーシヨン即ち一擧手一投足と雖も分秒を爭はざるを得ざるは明敏，峻遠，敢斷等の性格を鍛練し，攻撃により進取邁進の性格を與へ防禦により用意周到，堅實，着實等處世上最も▲**大切なる性格の基礎**となり尚衆人稠坐の前に於ても斷々乎として所信を實行する有益な精神の紀原ともなる等**智情意の三性格**を最も具體的に涵養する事が出來る」[21]とする徳育主義にもとずく人格形成論的なもの，「學校でも亦野隊の盛衰で以て▲**學運の消長を卜す**ることが出來，試合の如何によつて學生の元氣を伺ひ知ることが出來る」[22]とする野球の盛衰を学運の消長に関連づけて評価したもの，「吾人の筋骨を逞しうし寒暑疲勞に對する抵抗力を増し神經を敏捷にし動作を輕快ならしめる効果あるは云ふ迄もなく，克己，忍耐，節制，警戒，勇往，邁進，不屈不敵，其他色々な美德を養はしめ，又多々實地に學理の應用を工夫するの機會を與へて己修の智力を錬磨する良手段ともなり，之に伴ふ昂奮熱狂成敗喜憂等の刺戟の裡に不知不識▲**圓滿な情育**を遂げしむる大効力あるものである，之を筋骨育，神經育と做し，又之を智育，情育，意育として考へれば殆んど人の教育を左右する力ありと云ひ得るのである」[23]とする全人格的な機能を野球に求めたものがある。また，「獅子は如何なる小獸を搏つ塲合にも其全力を盡す。諸多の運動競技中，野球が最も興味ありとせらるゝは，一に其競技者の全精力を傾倒して餘さゞる壯觀に歸せずんばあらず。（中略）攻防の備へ整然として一絲亂れず，腕力脚力の全運動に加ふるに，作戰計畫に智囊を絞り，間一髪の機智を要すると共に，最も愼重なる警戒を要し，而も加ふるに協同的努力を養はしむるものは，吾人ベースボール競技を以て其最なるものと爲す」[24]とする心身の集中力と協同性を評価したもの等，学生野球に対する一般的な評価は以上のように

集約されるものと考える。

（2）応援をめぐる問題

また，応援をめぐる問題を指摘している論者の中では，「試合に際し殆ど必須の道具となつてゐる例の▲**應援團の向上**を促す事は最も必要であらう，自分の知る限りでは應援は尚彌次的態度を脱してゐないが之は甚だ遺憾な現象である，彌次的應援は具眼者には悪感を催させる，卑劣な應援が應援の眞義に合はぬは言はずして明かである應援は飽迄正々堂々男子として恥づかしからぬ態度に出て貰ひたい，野球の向上は宜しく應援の改善より始むべきである，彌次的應援の絶無を期することは至難の業であらうが其の境地を目標として進んでもらひたい，要するに野球に伴ふ色々の弊害も其の根源は野球そのものに在るのではない」[25]，「彌次の猛烈な方は夫れ丈けのハンデキヤツプを附けて敵の弱點に附け込むと云ふ段になるから，是れでは試合の性質を沒却して**彌次戰**となる苟くも第二の國民として國家を雙肩に憺ふ大責任ある現代の青年に依つて演ぜらるゝ野球試合が實に卑怯，未練，下劣，醜悪も甚だしき妨碍や邪魔を敢てするは正に唾棄すべきである，眞劍勝負なら虚を以て實を衝くも差支なからうが野球試合に於ては**斷じて陋策を許すべきではない**」[26]という応援における弥次そのものを否定するようなものから，「殊に近來一般野球試合に於ける遺憾至極な現象は變則な彌次振りの強烈なる勃興である惟ふに▲**彌次の本領**は味方の選手を督勵するにある、然るに近來は味方の督勵處か極力敵の防碍をなし殊に投手の投球を狂はすとか敵全體をアガらせる陋劣極まる目的の下に甚だしき人身攻撃迄敢て爲すに至つては沙汰の限りである（中略）**彌次るなら正々堂々**の彌次振りを見せて貰ひたい，更に忌憚無く云ふと近來の野球觀覽者は野球試合其の物に興味を有するよりも狂瀾怒濤的の彌次振りに恐ろしく妙味を持つ者も尠くはない斯くの如きは野球技を弄視するものであつて實に慨嘆に堪へない」[27]，「彌次は本來悪い事ではない，對手の感情を害せず之に對する禮儀を失せざる限り，自校自會の選手に大々的聲援を與へ之を鼓舞奬勵して奮鬪せしむる，美はしき此の心は頓ては一朝事あらん時に轉じて外征の我軍士に對する熾烈の同情後援になるのである，併し此の競技に關する熱狂激昂が一歩を誤ると卑怯の武藝者の如くになる」[28]，と本来の弥次は肯定しながらも，その内容の是非を問うものまで論じられている。

これらに対し「吾輩は野球は行らなかつたのですが野球の彌次は隨分猛烈にやつた組です，吾輩の一高へ入學したのは明治二十八年で當時野球界の覇者と云へば一高に限られてゐたもので（中略）野球試合そのものゝ意味も今は技を競ひ術を較べると云ふ傾向の様ですが當時は名を試合に藉りて專ら意氣の剛健さを較べるに在つた」[29]と自らの体験から対抗競技の意味の変化を論じ，問題になっている弥次の歴史を記したものもあった。

以上のように応援をめぐる問題のほとんどのものが，弥次的応援が原因で生じているかのごとく論じられているところにこの問題の特徴がうかがわれる。

（3）選手の学業に係わる問題

さらに，「**選手と學業の問題**は屢耳にする處であるが本校に於ては幸ひにして嘗て其の實際問題に際會し之に惱まされた經驗は無い，若し選手中に學力劣等の者を出した場合には警告を怠らぬ方針である」[30]と論じられているものに代表されるように，特に「野球論争」で中心的問題となった野球選手の学業不振問題に関して，否定的に論じているものが多く存在したことも特徴的であった。中には「**野球は弊害がない** 從來多く弊害と目された點は『運動家の成績不良で』あるけれども些細に觀察すると全く正反對に運動家は好成績である（中略）木下醫學博士が數年來運動家と非運動家との在校中と卒業後の成績を取つた結果は共に**運動家の方が優つて居る**，殊に社會に出てから運動家は非運動家に比して驚くべき優勢を示して居る（中略）運動家不成績云々は斯く唯皮相に觀察した結論に過ぎぬといふ事を著書に於て

發表して居る」[31]，と客観的な調査結果を根拠にして，野球選手の学業不振問題をかなり顕著に否定しているものもあった。さらに過去においては，野球選手の学業不振は事実であったとしても，それは「有識者の間にさへ野球其ものが悪い運動であるかの如く誤解せられ爲めに父兄や教師も無定見の壓迫を加へた結果であります，是れに對しては苟くも人の子を教育すると云ふ重大な責務を有する教師が平常餘りに運動に對して不用意であつたと云ふことも非難されるべきでありますが選手自身も運動の精神を了解せず手段たる技倆を偏重し學業に努めなかつた爲だらう」[32]として，「近來社會一般に運動に對する觀念が進歩したのと球界先覺者の努力に依つて野球とは如何なるものであるかと云ふことが世間に了知せらるゝと共に監督職員や選手の自覺によつて從來の弊風は一掃せられ（中略）參加選手諸君の學業成績が何れも優良なこと（中略）は吾野球界の爲に萬丈の氣を吐くもので又全國中等學校野球大會の爲誠に慶賀せざるを得ぬ次第であります」[33]とその後の学習努力にもとづく成果を，「第一回全国優勝野球大会」参加選手の学業成績にその例を挙げている論者もあった。

（4）勝利至上主義に係わる問題

一方，「野球論争」当時におけるのと同様に一貫して論じられている点は，対抗競技における勝利至上主義的な姿勢に対する，古来の倫理的規範にもとづく野球観・スポーツ観の存在である。とりわけ，「彼の眼前の勝負にのみ熱中して快を一時に取ると云ふ様な心掛けでは寧ろ百弊あつて一利なしと信ずる」[34]，「勿論勝つた方が好いには極つてるが手段方法の如何を問はず狂熱的に只管勝つと云ふ事に對して全力を傾注するは一は神聖なる武士道乃至野球道より見て決して慶賀すべき現象ではない（中略）如何なる場合も眞面目なる技倆を發揮し眞摯なる態度を以て最善を盡したる以上は勝敗の如何は敢て問ふ必要はなからうと信ずる，勝つと云ふ目的の爲には如何なる手段をも選ばん様では第一▲**國民性の涵養**上より第二學生たる本分より視て最も排斥すべき事と思ふ」[35]と論じられているものや，「**野球試合の根本目的**は勝敗の如何にあらずして飽迄青年らしく學生らしく立派に上品に正當なる手段の下に所謂ベストを盡して技を樂しめば事足れりで何も勝敗の二字に全然拘泥したり執着する必要は無いと信ずる，此勝敗の二字に對し全責任と全手段を傾盡する結果は方法の如何なぞは毫頭顧慮する處なく專心一意勝つ爲の猪突猛進のみとなるので近來は恁うした惡風が愈甚だしくなつて來て（中略）實に武士道より觀れば▲**御話にならぬ狂態**である，是れではフイヤー・プレエー卽ち公平なる試合は迚ても望まれぬ」[36]と論じられているものに代表される。また「野球に限らぬが運動はすべて精神修養の手段である，そして其修養の手段であると云ふ所に運動の價値が存する、擊劍でも柔道でも技術其ものは無意義のもので此技術を通じて精神修養をし古英雄の築き上げた武士道の精神を會得するといふことに眞意義がある，從つて青年の元氣を振興すべき運動を擊劍柔道に限ると云ふが如きは偏見の甚だしいもので生兵法大怪我の本と云ふ事は斯ういふ場合に用ひらるべきだと思ふ，野球によつても亦十分に所謂武士道の精神を會得し得るのみならず九人が九人として活動するのではなく歸一して一人格者となつて活動することが對内對外兩面に於て多くの修養の機會を提供する，殊に九人が歸一しなければならないと云ふ所に特徴がありこれが又修養と云ふ方面から見て非常に妙味ある所と思ふ」[37]というような武士道的精神の修養そのものを目的とするスポーツ観が論じられていたり，「野球其者を純日本式に應用することを望む卽ち我國固有の武士的典型に當嵌めたる野球を發達せしめ精神と健康との修養に其趣味と實益を利用し以て有終の美を収むるにあり」[38]と，この武士道的精神を応用した「日本式野球道」なるものを論じているものもあった。

以上のように，朝日新聞紙上「第一回全国優勝野球大会」の前後にあらわれた学生野球観の検討を通じて明らかになった当時の学生野球をめぐる問題点とは，応援のあり方をめぐる問題

が大多数を占めており，野球そのもの，あるいは選手自身に直接係わる問題点を指摘しているものはほとんどなかった。そして，前述した学生野球に対する評価や「最近に至つて野球の盛んになつたのは我民族が世界的に發展する土臺を作るものとして頗る喜ぶべきことである而して朝日新聞が今回野球大會を催しこの傾向を助成することは社會に大なる貢獻を爲すものとして喜ぶと同時に其成功を祈るものである」[39]とする一文に代表されるように，総括的にいえることは各識者とも学生野球の将来に向けての期待観が強くあらわされているということである。このことは「野球論争」以後，約四年の間に，応援の問題を中心としたいくつかの問題点を内在しながらも，学生野球の教育的価値が広く理解されるようになり，なおかつ学生野球に内在する問題点を改善し，学生野球をよりよく発展させていこうとする世論を強く反映したものとなっていたことはいうまでもないところであろう。

Ⅲ　『野球大会回顧座談会』における証言

ここで取り上げる『野球大会回顧座談会』とは，昭和24年８月，甲子園球場貴賓室において，全国大会の創始以来，直接それに係ってきた関係者が集まり，回顧座談会を開いた際の記録である。出席者は田村省三，中尾済，中澤良夫，佐伯達夫，山口覚二，小西作太郎，村山長挙，上野精一であった。

まず「大会創始前，野球に対する朝日の態度」ならびに「東朝の『弊害論』」の章では，この中で大会開催に中心的役割を果たした田村省三が東京朝日新聞の野球弊害論について触れた後に，「しかし私は大阪では別にそんなことに構わずにやっておった」[40]と東京朝日新聞社と大阪朝日新聞社の編集方針の違いを証言しつつ，「しかしこの撲滅論がやはりこの大会を拵える時に相当な妨げになった。だからこの大会が完全にできるかどうかということを私ども相当に案じた。ことに社会で野球界の事情によく通じている人達は一番難儀した」[41]と述べ，その一例として「大阪で予選大会を開くことができない，予選を開くというても誰も手伝ってくれない，そういう状況になった。それがために大阪だけでは代表を選ぶことができず，美津濃運動具店がやっている関西学生野球大会の出場校のうち大阪，奈良，和歌山の一府二県出場校により代表選抜試合を行って　その優勝校和歌山中学チームを関西代表として大会に出て貰ったというような実情でありました。これが大会を開くに当ってのおそらく第一の困難なことであったと思います。」[42]と東京朝日新聞の『野球と其害毒』に起因する妨害によって，大阪では朝日新聞主催の予選を開くことができず，従来から美津濃運動具店が主催している関西学生野球大会の優勝校を，関西代表として出場させた経緯などが語られている。また村山長挙は「東京朝日では撲滅論がある。大阪では奨励せよという。その解決方法には困った。しかし野球というものはやる以上は精神を重んじてやらなければならん（中略）体育上からいうても発育盛りの人間に相当によい。もう一つは団体的な競技で己を犠牲にしてチームをよくするので非常によい，私は奨励すべきものだと思ったから賛成をした」[43]と彼の父，村山龍平の当時の心情を回顧している。そして開催当時，大阪朝日新聞記者であった中尾済が，東京朝日新聞と大阪朝日新聞との間，つまり「野球害毒論」と「全国優勝野球大会」開催との間に介在する矛盾の弁明として，以前に自ら論じた一文を引用し，「野球に限らずすべてのスポーツは有益な一面と有害な一面とを持っており，放置すれば堕落する傾向のあるのがスポーツだ，そこで『よき監督と指導』が必要で，本社がこの大会を開くようになったのもこの『よき指導』を行はんがためだという風に大会創始の動機を説明したのです，大正四年からつい四，五年前東朝で撲滅論を書き立てた，そのホトボリのさめないうちに大朝が大会をやるというのは誰が見てもおかしかったに違いないと思ったから十五年史に（ママ）機会に暗にその弁明を兼ねて書いたのです。つまり野球は叩いてもつついても滅びるものではない。ますます盛んになるばかりだ。

そして放っておけば弊害のみ多くなって困るときが限ず来る。東朝はかつて野球の弊害をあばき立てて攻撃したが一向に利目がなかった，それで大朝は方針をかえてこれを善導することにした…ということでロジックを合せたつもりだったのです」[44]と論じている。このように当時としては一般的に言われているような，朝日新聞社総体としての学生野球に対する見解は存在しえなかったはずであるが，このような弁明をあえて行う必要性に迫られているところに，「ロジックを合わせた」朝日新聞社としての苦衷があったものということができよう。

おわりに

以上のように，「第一回全国優勝野球大会」開催当時においても，東京朝日新聞と大阪朝日新聞の学生野球に関する編集内容，及びそれらを含む学生野球に対する姿勢は，それぞれ独自の方針にもとずいて展開されていたことが，両紙の論調の比較・分析とともに，当時における同社社会部運動記者による証言からも明らかにすることができた。そしてそれらは，筆者らがすでに先行研究で指摘してきた，東京朝日新聞と大阪朝日新聞における編集方針の独自性が，創設当時からの組織運営（組織，企画，財政，販売）の独自性に，基本的に起因するものではなかったかということが，さらに論証されたのではないかと思われる。

そして最後に，「野球害毒論」と「全国優勝野球大会」開催との間に介在する相互関係を「朝日新聞社」総体としてとらえる場合，一方の東京朝日新聞においては「野球排撃論」を展開し，他方の大阪朝日新聞では主催大会を開催するといった「野球擁護論」的態度を示しているという矛盾についての疑問である。このことに関しては，従来から言われてきたような「野球害毒論」を展開しながらもその弊害を取り除くための一手段として，朝日新聞社自らが「全国優勝野球大会」の開催に踏み切ったとする構図は，後に描かれたものであり，その実相は，すでに述べた以上のような東京朝日新聞社と大阪朝日新聞社の組織運営の独自性と，それにもとずく編集方針の相違から基本的に生じたものであると，結論づけることができるのではないかという点を付言してまとめとする。

参考・引用文献

1）秦真人・加賀秀雄『1911年における野球論争の実証的検討－「野球と其害毒」をめぐって－』（第36回東海体育学会における報告，1988年11月27日），ならびに『1911年における野球論争の実証的研究（Ⅰ）－「野球と其害毒」をめぐって－』総合保健体育科学，第14巻1号，1991年3月31日発行，pp. 25－31.

2）秦・加賀『「野球害毒論争」（1911年）の実相に関する実証的検討－各新聞論調の分析を通じて－』（第40回日本体育学会における報告，1989年10月14日）および『「野球害毒論争」（1911年）の実相に関する実証的検討－新聞各紙の論調分析を通じて－』総合保健体育科学，第13巻1号，1990年3月31日発行，pp. 19－31.

3）秦・加賀『1911年における野球論争の実証的検討－「東京朝日新聞」及び「大阪朝日新聞」の編集内容の相違をめぐって－』（第38回東海体育学会における報告，1990年11月18日），および『1911年における野球論争の実証的研究（Ⅱ）－「東京朝日新聞」及び「大阪朝日新聞」の編集内容の相違をめぐって－』総合保健体育科学，第14巻1号，1991年3月31日発行，pp. 33－38.

4）新たに発掘した史料とは『野球大会回顧座談会』のことである。これについての詳細はⅢ章で述べるが，この回顧録が作られた趣旨を記載している「はしがき」を紹介しておく。
「一，この座談会は朝日新聞社史の一史料として計画されたもので，野球大会史は昭和四年の第十五回と戦時中絶の昭和十八年に大阪本社より單行本として出ているがそれらに出ていないような，殊に草創期の広く伝っていないものを詳しく後に残しておきたい心算のものである
一，大会創始当時以来直接関係された人達の生の聲を収録し得て初期の苦心や大会の発展過程を知るに貴重な資料であると信じている
一，本記録は昭和二十四年八月甲子園球場貴賓室での録音盤を根幹として，その後佐伯達夫氏の熱心な考証と加筆を加え漸く今日刊行したもので氏の並々ならぬ御苦労を深く感謝する」
朝日新聞編年史別冊『野球大会回顧座談会』昭和28年5月，朝日新聞社史編修室

5）「野球三十六計（一）」『東京朝日新聞』（明治45年5月23日付）.

6）安部磯雄「日本の國技となるべき者▽相撲か野球

か」『東京朝日新聞』(大正3年1月1日付).
7) 安部,「日本の國技となるべき者▽相撲か野球か(讀)」『東京朝日新聞』(大正3年1月3日付).
8) 安部, 同上.
9)「野球界(上)」『東京朝日新聞』(大正4年4月24日付).
10) 他山生「慶應野球部の改善を促す(一)」『東京朝日新聞』(大正4年4月23日付).
11)『大阪朝日新聞』において,これらの記事は以下の日付で掲載されている。
「九州野球大会」(大正1年11月24－25日付),「東海聯合野球大会」(大正2年8月12－16日. 11月8－10日. 大正3年6月30日付),「関西野球大会」(大正2年8月4－7日, 11月2－5日付),「北陸野球大会」(大正2年8月26－30日付),「全国直轄学校野球戦」(大正2年12月27－30日付).
12)「北陸野球大會雑觀」『大阪朝日新聞』(大正2年9月1日付).
13) 社告「日米大野球戦」『大阪朝日新聞』(大正2年9月21日付).
14)「大野球戦前記」『大阪朝日新聞』(大正2年9月23日付).
15)「大野球戦前記」『大阪朝日新聞』(大正2年9月29日付).
16)「日曜附録野球號」『大阪朝日新聞』(明治44年9月24日付).
17) 鎌田栄吉「野球が與ふる偉大の教訓(下)」『東京日日新聞』(明治44年9月17日付).
18) 鎌田,「野球の是非は遣方一つ」『大阪朝日新聞』(大正4年7月23日付).
19) 水島鐵也「運動競技と其の取扱ひ」『大阪朝日新聞』(大正4年7月28日付).
20) 末廣重雄「世界的發展の根柢」『大阪朝日新聞』(大正4年7月17日付).
21) 鎌田,「野球の是非は遣方一つ」, 前掲.
22) 原田助「元氣の消長を卜する野球」『大阪朝日新聞』(大正4年7月24日付).
23) 武田千代三郎「筋骨育と神經育」『大阪朝日新聞』(大正4年8月4日付).
24) 長谷川万次郎「全國優勝野球大會に就て」『大阪朝日新聞』(大正4年8月18日付).
25) 水島, 前掲. 26) 鎌田,「野球の是非は遣方一つ」, 前掲.
27) 安部,「野球界の善傾向と悪傾向(下)」『大阪朝日新聞』(大正4年7月20日付).
28) 武田, 前掲.
29) 木下東作「當年野球試合の意氣」『大阪朝日新聞』(大正4年7月26日付).
30) 水島, 前掲.
31)「優勝は誰れ」『大阪朝日新聞』(大正4年7月13日付).
32) 都築彌四郎「選手諸氏に望む」『大阪朝日新聞』(大正4年9月2日付).
33) 同上.
34) 大久保利武「品性陶冶が主眼」『大阪朝日新聞』(大正4年8月3日付).
35) 安部,「野球界の善傾向と悪傾向(下)」前掲.
36) 鎌田,「野球の是非は遣方一つ」, 前掲.
37) 都築, 前掲.
38) 平岡寅之助「大會の與へたる教訓」『大阪朝日新聞』(大正4年9月1日付).
39) 末廣, 前掲.
40)『野球大会回顧座談会』(昭和24年8月), p.11, 田村.
41) 同上
42) 同上, p.12, 田村
43) 同上, p.22, 村山
44) 同上, p.23, 中尾

なお引用史料中の漢字については,一部新字体を用いたことを付言しておく。

(1991年11月30日受付)